



第5章

安土城での絶頂期から 本能寺の変

天正4年(1576)～天正10年(1582)

【信長43歳から49歳】

第5章

安土城での絶頂期から本能寺の変

天正4年(1576)～天正10年(1582)

【信長 43歳～49歳】

天正 4年(1576)	43歳	<small>にわながひで</small> 丹羽長秀に安土城築城を命ず
		本願寺攻撃、天王寺(四天王寺)合戦で <small>いっごうしゅうと</small> 一向宗徒を破る
		毛利の水軍が織田の水軍を破る
		<small>しょうさんみ</small> 正三位に叙せられ、内大臣に
天正 5年(1577)	44歳	<small>やまとしききんじょう</small> 松永久秀父子、信長に背いて大和信貴山城に籠るも、信忠軍に攻められ自刃
天正 6年(1578)	45歳	<small>しょうにい</small> 正二位に叙せられる
		荒木村重が足利義昭・毛利氏・本願寺と通じ、信長に背く
		<small>くきよしたか</small> 九鬼嘉隆、毛利氏の水軍を破る
天正 7年(1579)	46歳	安土城天主完成
		<small>のぶかつ</small> 信雄、伊賀に出兵し敗れる
天正 8年(1580)	47歳	羽柴秀吉、播磨の三木城を落とす
		本願寺が和議を受け入れ、顕如ら大坂より退去
		その後、石山本願寺炎上 <small>きくまのぶもり</small> 林通勝父子・佐久間信盛父子を追放
天正 9年(1581)	48歳	京都で馬揃え
		<small>いなば</small> 信雄ら伊賀平定 秀吉、因幡鳥取城を開城させる
天正 10年(1582)	49歳	<small>たけだかつより</small> 武田勝頼父子、甲斐田野で自刃し武田氏滅亡
		三職推任の勅使と面会
		秀吉、備中高松城の水攻め開始
		本能寺の変

5-1 安土城を築く

天正3年(1575)、信長は信忠に家督と岐阜城を譲ると翌4年、丹羽長秀に近江安土山に築城を命じ、安土城は天正7年(1579)に完成しました。

安土城 普請始まる

安土城の着工は天正4年(1576)正月、翌2月には信長自身も岐阜から安土へ居を移しています。

安土は琵琶湖の水運に加え、京と北陸を結ぶ交通の要所でもあり、越前・加賀の一向一揆や上杉謙信への対応など、利点の多い地であったと考えられています。

これまでにない巨大な城の普請に奔走した丹羽長秀の功労を賞して、信長は名物の珠光茶碗を与えたといわれています。安土城普請のために、尾張・美濃・伊勢・越前他、5畿内10か国以上から人足を集め、また、京都、奈良、堺の大工や職人も集められました。石垣の材料のうち、「蛇石」と呼ばれる巨石は、羽柴秀吉などが奉行となり1万人余りで三昼夜かかって運んだといわれています。この巨石運搬も烏丸中御門第同様、信長が「御巧」を務めたといわれています。

しかし、信長は、正月から始まったこの工事も、京都に自分の屋敷として二条屋敷を造営するため4月末には普請を嫡男信忠に任せ上洛します。



丹羽長秀像(東京大学史料編纂所蔵)模写



安土城跡(滋賀県近江八幡市)



安土城天主断面(内藤昌復元/安土城郭資料館)

天主

安土城の天主の外観は七重造り、地下1階地上6階建てで、天主の高さが約32メートルあったとされています。内外ともに建築の妙技を尽くして造営され、信長のさまざまな意向を反映し、それまでの城にはない独創的な意匠で絢爛豪華な城であったといわれています。

最上階の七重目(6階)は、三間四方の狭い空間でしたが、徳のある理想的な皇帝・学問の世界

を代表する^{こうもんじってつ}孔門十哲、知徳を備えながら世俗の利益・名誉を求めない賢人、これらを自らの居所の最上階に配し、聖なる空間としていたようです。また、城下の人々を見下ろす展望台のようなものも存在しました。

全体概要

城内は居住や政治の場として充実し、寺院や天皇を迎えるための御殿も設けられたとされています。信長の王権構想は、日本と天皇とを越えんとするところにあったとされ、また、中国を強く意識し、中国的世界を取り込んでいくことで、天皇と將軍とは異なる地平に立つことを示そうとしたようです。城郭の規模、容姿は、太田牛一やルイス・フロイスの記述にあるように天下布武を象徴し、一目にして人々に知らせるものであり、山頂の天主を信長の居とし、家族は本丸付近で生活をさせました。また、家臣は山腹や城下の屋敷に居住していたとされています。

安土城は独創的で絢爛豪華な意匠である反面、敵の侵入防止のための設計がほとんどなく、軍事面での防御が乏しかったともいわれています。

5-2 政権の新段階

安土城築城の前年、天正3年(1575)は信長にとって大きな飛躍の年でした。5月に長篠・設楽原ながしの したらがはらの戦いで大勝利をおさめ、7月に誠仁親王主催まねの鞠会まりえに出席し、官位昇進の勅詔を賜りますが、信長はこれを辞退し、代わりに老臣たちへの賜姓、任官を要請して許されています。

従三位権大納言・ 右近衛大将

天正3年(1575)、村井貞勝の担当した公家救済のための徳政令は、債務破棄についてはかなりの成果が上がりましたが、所領については権利関係が複雑で、容易には進みませんでした。7月には叙任を辞退しますが、その後、越前一向一揆せんめつを殲滅じゆさんみごんだいなごんし、11月、従三位権大納言うこのえのだいしやうに叙任し右近衛大将に任官することになりました。それにあたり、信長は公家たちへの新地給与を大規模に行いました。宛行に用いられた土地は、旧平安京の区画内とその近辺、幕府直轄領で、わかっているだけでも2,000石を超えています。

これは公家たちへの扶持給付ふちであり、信長自らが公家を扶持衆化する(俸禄を支給して臣下とする)第一歩でした。

将軍に代わる者

信長が叙任した「権大納言」は追放された義昭よしあきと同じ官位で、朝廷側は義昭に代わり京都を治めてほしいと考えていたようです。

信長は織田家の家督を長男信忠に譲り、尾張国、美濃国びふと岐阜城を譲与します。織田家の家督から自らを解放し、新たな立場を創造しようとしていました。天皇、朝廷を否定しないで官位を叙任されるという形をとり、天皇、朝廷を支えてきた公家、寺社に新たな知行地を与えて経済基盤を保証しました。もちろん強大な軍事力と分国支配が政権の根拠ではありましたが、その形はまだ整ってはいませんでした。

ただ、このころから家臣に「上様」と呼ばれることが多くなりました。

5-3 毛利、本願寺連合に苦戦

長島・越前・石山の本願寺3拠点のうち2つが撃破されたことで、顕如は信長に自らの行為を詫
び、再度和議を結びました。ところが、中国地方の毛利氏の台頭により、再び本願寺が挙兵します。

織田家、 毛利家との友好関係

信長が美濃攻略を成し遂げた頃、毛利元就は
尼子氏を攻め滅ぼし、中国地方一帯を治める大
勢力となっていました。

永禄11年頃、毛利元就と敵対した大友宗麟^{おおともそうりん}が
尼子残党と手を結んで、毛利氏に攻め込んだ時
には、信長は元就の求めに応じて、羽柴秀吉が率
いる兵を派遣しています。

天正4年(1576)2月、信長に都を追われた義昭^{よしあき}
は備後国に動座しますが、毛利氏は鞆^{とも}(広島県
福山市)に御所を提供して義昭を保護します。毛
利氏は、義昭の処遇について織田氏と折衝を重
ねました。この時期までは、元就の死後家督を相
続した輝元と信長は、敵対してはいませんでした。
その後、石山本願寺が挙兵した際、毛利氏が
顕如を支援したことで、信長と対立することにな
ります。



絹本着色毛利輝元像(毛利博物館所蔵)

本願寺挙兵

天正3年(1575)、信長と本願寺顕如との和議は、前回の和議とは異なり、著しく信長に有利な状態でした。

同年、中国地方では、毛利氏が東へと勢力を拡大していきます。織田方へと寝返った備中の三村氏を備中兵乱で滅ぼし、備前・美作でも宇喜多直家と同盟を結んで天神山城の戦いを後援し、毛利氏と断交していた浦上宗景・三浦貞広を失領させます。これにより、陸路、海路とも東への侵攻路を確保して、毛利軍は織田軍に対抗するべく、大坂の本願寺との連携を模索し始めます。

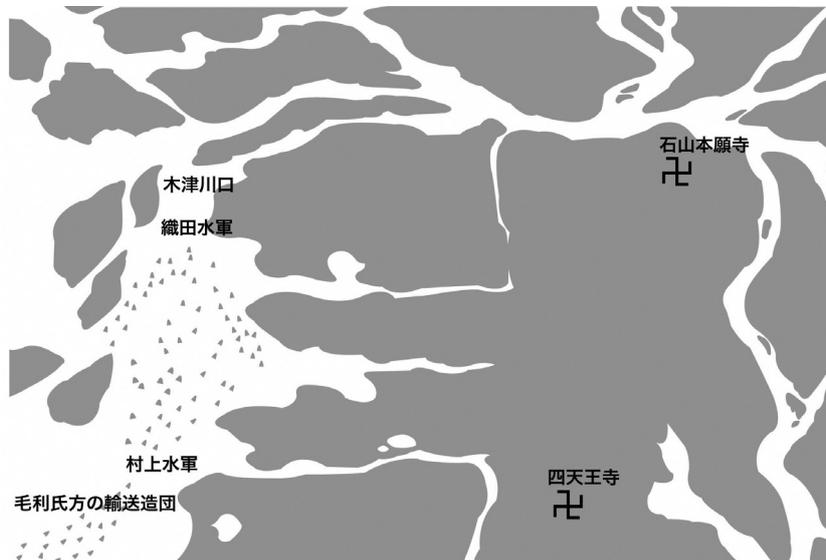
こうしたそれぞれの思惑の中、顕如は、毛利輝元に帰洛の支援を求めている足利義昭と手を組み、天正4年(1576)春、3度目の挙兵を敢行しました。信長は同年4月14日、石山本願寺を三方から包囲することを命じました。織田軍は木津を攻め込みましたが、本願寺軍は弾薬・兵糧を補給し、鉄砲で木津の織田軍に応戦、天王寺砦付近まで攻め込みました。

天王寺合戦

信長は思わぬ敗戦の知らせを京都で聞き、すぐに出陣し河内若江に入りました。包囲を突破して砦に入るとすぐ、光秀をはじめとする砦内の兵たちと合流して戦闘を開始します。

本願寺軍は織田軍が籠城策を取るものと思い込んでいたため浮き足立ち、石山本願寺に退却しました。信長はそれを追撃させ2,700余りを討ち取ったといわれています。その後、信長は石山本願寺の四方に付城を、住吉の浜手に要害を10か所設け、本願寺を完全包囲し、海上封鎖も行ないました。

ここで顕如は、毛利氏に応援を要請します。7月15日、村上水軍など毛利水軍約600艘の船が、兵糧・弾薬を積み込み木津川の河口付近に現れます。これに対応し、織田軍は配下の九鬼水軍など約300艘で木津川河口を封じます。しかし、数に勝る毛利水軍は、焙烙火矢で織田軍の船を焼き払い駆逐し、本願寺に兵糧・弾薬を届けました(第一次木津川口海戦)。この合戦により、信長軍は一旦兵を引き、監視を強化し体制を中止することになります。



石山本願寺と天王寺位置図

5-4 上杉謙信との関係

上杉謙信は、越後国の武将で信長とは長年友好関係にありましたが、天正4年(1576)、謙信と本願寺が和睦したことにより敵対関係へと移っていきます。

信長と 上杉謙信

上杉謙信は、越後国の武将で、天文17年(1548)、19歳のときに病弱な兄から家督を譲られます。2年後には越後の国主となり、優れた軍事的才能を発揮し国内を平定します。内乱続きであった越後国を統一し、戦や政だけではなく、産業を振興して国を繁栄させていきます。長年に渡る武田信玄との「川中島の戦い」では壮絶な死闘を繰り返します。

信長との関係は永禄7年(1564)に始まり、書簡を通じて友好関係が続いていました。対武田、対越中・加賀一向一揆で利害が一致していたからです。

元龜^{げんき}3年(1572)には、信長と謙信は同盟を結んでいます。また、信長は「洛中洛外凶屏風」^{らくちゅうらくがいしゅびょうぶ}(狩野永徳筆^{かのうえいとく})を友好の証として謙信に贈っています。

しかし、こうした友好関係も、信長の勢力拡大によって変化していきます。

天正元年(1573)8月、越前に侵攻した信長は、謙信に加賀の能美・江沼両郡を制圧したことを伝え、加賀は自らの分国であることを表明します。

さらに、天正3年(1575)、信長は長篠^{ながしの}・設楽原^{したらかはら}の戦いに勝利したことを謙信に伝えると、謙信も毛利氏と同じように、信長の分国拡大が自らの分国に影響を与え始めることを察知し、対決姿勢へと転換していきました。



上杉謙信肖像(東京大学史料編纂所所蔵)

足利義昭の 働きかけ

天正3年(1575)、信長に都を追われた足利義昭は謙信に、幕府再興のため信長を討ち上洛することを要請します。この時期、謙信は同盟をないがしろにする信長との決裂を決意しています。

天正4年(1576)、謙信は信長と対立する石山本願寺の顕如と手を結びます。さらに、西国の実力者毛利氏あしかがよしあきと同盟を結び石山本願寺、足利義昭、毛利からなる反織田包囲網を成立させました。



狩野永徳筆による洛中洛外図屏風(米沢市上杉博物館所蔵)

5-5 松永久秀の謀反

松永久秀は三好三人衆とともに、当初は信長に敵対する勢力でしたが、激動の時代の中で、時には協力者となり離合集散を繰り返します。



松永久秀の墓がある達磨寺(奈良県王寺町)

三好長慶に 仕える

松永久秀は、三好長慶に仕え、室町幕府との折衝役を務めるなど三好政権の要職として活躍します。また、室町幕府第13代将軍足利義輝あしかがよしてるの

傍で執務することも多く、三好長慶の長男・義興とともに政治に携わり、義興とともに官位を授けられるなど高い地位を得ていました。長慶の死後は三好三人衆と時には協力し、時には争うなど、混乱する畿内情勢の中心人物の一人でもありました。

織田軍家臣へ

信長が義輝の弟・足利義昭^{よしあき}を奉じて上洛すると、一度は降伏してその家臣となります。茶器「九十九髪茄子」^{つくもなす}を献上して領国を安堵され、以後は織田家の一武将として畿内を中心に戦いますが、二回ほど信長を裏切り敵に回ります。

離反

一度目の離反^{げんき}は元亀元年(1570)です。武田信玄・足利義昭と通じましたが、後の義昭追放に伴い降伏しました。そして、天正5年(1577)、上杉謙信の敵対と歩調を合わせるように二度目の離反に踏み切ります。このとき、信長は本願寺、上杉謙信との抗争の最中で、久秀との和睦を模索しますが、これを拒まれます。

信長は、二度目の裏切りの際、名器「平蜘蛛釜」^{ひらくもがま}を譲れば許すと説得します。

久秀はその条件を拒絶し、信貴山城^{しぎさん}に火を放ち「平蜘蛛釜」を叩き壊して切腹したといわれています。東大寺大仏殿を焼き払った日からちょうど10年目の同じ日だったため、後に、大仏を焼いたら自分も焼いたと人々にいわれるようになったと伝えられています。その所業と有能さから「乱世の梟雄」^{きょうゆう}と呼ばれていました。



松永久秀の墓

5-6 本願寺包囲網強化

本願寺

天正4年(1576)、九鬼水軍が木津川沖の海戦で敗れて以来、いかに毛利水軍の兵糧入力を阻止するかが、本願寺攻略の焦点となっていました。

鉄張船による 木津川海戦勝利

信長は毛利水軍攻略の秘策として鉄張船の建造を指示しました。九鬼嘉隆が^{くきよしたか}大船6隻、^{たきがわかずます}滝川一益が大船1隻を担当しますが、各資料から、この鉄張船には三門の大砲と多数の大鉄砲が装備されていたことがわかります。

重装した鉄張船6隻を中核とする九鬼水軍は大坂沖へ進み、木津川河口に展開します。毛利水軍は約600艘とされ、4時間の交戦が繰り広げられます。弓と鉄砲で四方より攻撃を行う毛利水軍に、九鬼嘉隆は敵船を近くに寄せ大砲を一度に撃ち放し、多数沈め、約30隻を乗っ取り勝利。敵船は寄り付くことができず、九鬼水軍は堺港へ着岸します。翌日は大坂湾に出て船を止め海上を封鎖、毛利水軍の石山本願寺への兵糧補給を防ぎました。

さらに、本願寺を取り囲む砦に、小姓衆、馬廻衆、弓衆を20日交替で勤番に加え、本願寺包囲網が強化されました。



九鬼嘉隆の肖像(東京大学史料編纂所所蔵)模写

5-7 本願寺ついに屈服

天正8年(1580)、10年以上にわたり、抗争を繰り返した信長と本願寺は和議を推し進めることで合意します。

荒木村重の謀反

天正6年(1578)10月、信長に仕え数々の武勲を挙げてきた荒木村重が、有岡城で、突如反旗を翻します。

荒木村重の謀反の知らせを受けた信長はこの^{こでらよしたか}情報を疑い、村重と旧知の仲の小寺孝隆(官兵

衛、のちの黒田孝高・如水)を使者として有岡城に向かわせ彼の翻意を促します。しかし村重の決意は固く、孝隆を拘束し土牢に監禁します。

以後、村重は有岡城に籠城し、村重の討伐を命じた信長と織田軍に1年の間抗戦し続けます。しかし、側近の裏切りや兵糧が尽き、毛利氏の援軍も現れなかったことで窮地に追い込まれます。



天正6年の反信長方の主な城(池上裕子『織田信長』吉川弘文館より)

和議までの経緯

この荒木村重の逆心は、当時、木津川沖海戦に苦戦中である信長にとって、対本願寺・毛利戦略を大きく揺るがすものになり11月3日、急遽上洛し、翌4日、朝廷に本願寺との和睦の仲介を申し入れます。

朝廷では、すぐに石山本願寺への勅使を走らせますが、本願寺はこれを拒絶します。毛利の意向なしで講和を決定できないとのことで、朝廷では毛利方への勅使派遣の準備が進められます。

しかし、第二次木津川沖海戦に勝利し、荒木村重が孤立したことにより、本願寺側の劣勢が決定的となり、信長軍は改めて本願寺侵攻を決め、朝廷による勅使派遣を取りやめました。

信長はこの後すぐ、村重の有岡城、播磨国の三木城攻めを開始します。

有岡城が陥落し三木城の情勢も悪くなると、天正7年(1579)12月、本願寺はついに恒久的な和議を検討するようになります。翌天正8年

(1580)3月1日、朝廷は本願寺へ勅使を送りますが、本願寺は和議を推し進めることで合意しました。信長も近衛前久を送り本願寺側との調整を諮りますが、3月7日には、本願寺側から信長に誓紙が提出され、信長と本願寺は3度目の講和を結びました。

本願寺退去

4月9日、顕如は嫡子である教如に石山本願寺を渡し、自らは紀伊鷺森御坊に退きます。これに対し、雑賀や淡路の門徒は経済的な支えであった石山を信長に渡すことに反発し、教如に対し信長への抵抗を申し入れ、教如も受け入れます。このため、顕如が去った後もしばらく、石山は信長に抵抗を続けますが、7月2日、遂に石山の受け渡しを教如勢も受け入れて雑賀に退去します。8月2日、石山は信長に引き渡されますが、直後に石山本願寺は炎上し消失してしまいます。

石山本願寺推定地(大阪市中央区)



5-8 天皇の位置づけ

正親町天皇おおぎまちは弘治3年(1557)に踐祚せんそし(天皇の位を受け継ぎ)、永禄3年(1560)に即位礼をあげています。天文21年(1552)、父信秀の死後家督を継ぎ、永禄3年に桶狭間の戦いで名をあげた信長は、正親町天皇とほぼ同じ時代を生きることになります。

天皇の 政治的利用

永禄12年(1569)、信長はルイス・フロイスらと謁見し、キリスト教布教許可を与えています。しかし、信長が岐阜ぎふに戻ると、正親町天皇がキリシタン禁制りんじの綸旨を出します。このとき信長は、一度は天皇の命に従うよう言いながら、フロイスからの直訴を受け、前言を撤回してキリスト教保護の立場をとります。このことから、信長は天皇を絶対的存在と考えていなかったことがわかります。

翌永禄13年(元亀元1570)、信長よしあきは義昭よしかに五カ条の条書を認めさせ、「天下静謐てんかせいひつ」に邁進まいしんすることを、正親町天皇に認められたと宣言します。「天下静謐」は、その後の信長の戦いにおいて、天皇に敵対する者からの平和という意味合いで大義名分として掲げられるようになります。

それだけでなく、天皇には戦を終結させるだけの力があつたため、志賀の陣、石山本願寺との戦いでは、信長は天皇を頼たのって講和に持ち込み、天皇を政治的に利用します。

正親町天皇へ 譲位の要求

天正7年(1579)、安土城がほぼ完成し、信長はそれまで京都の屋敷として使っていた二条御新造ごしんぞを、正親町天皇の皇太子誠仁親王まねひとに譲ります。そして、誠仁親王の第五皇太子五宮ゆうしを猶子(養子までいかない名目上親子)とします。誠仁親王は二条御新造に移り住み、二条御所と呼ばれるようになりました。信長の息のかかった次期天皇候補の誕生です。

そして、天正9年(1581)、信長は京都の皇居横で二度にわたり盛大に馬揃えを行います。正親町天皇は馬揃えを喜び、信長に使いを出して「左大臣に任せよう」と伝えます。信長は「正親町天皇が譲位し、誠仁親王を即位させたとき、私もあらためて左大臣を受けましょう」と返事をしています。しかし、正親町天皇は「今年是不吉の年にあたり、年まわりが悪いから譲位はできない」と答え、譲位は実現しませんでした。

5-9 京都馬揃え

信長は天皇や群衆の前で大規模な「馬揃え」を行います。その目的は、周辺大名を牽制し力を誇示するためであったと考えられています。これにより、信長は京都の平和回復と織田家の天下掌握を内外に知らしめることになります。



信長の前で名馬を披露し、馬揃えに臨む山内一豊(省光社「日本歴史図鑑」より)

京都での 馬揃え

天正9年(1581)1月15日、信長は安土城下で大規模な「馬揃え」を行ないましたが、京都でさらに大規模な馬揃えを計画します。

天正9年(1581)、馬揃えの奉行を命じられた明智光秀は、1月下旬から2月中旬にかけて、上京の東に馬場を構築し、さらに、急造の宮殿を建てます。この宮殿は急造にもかかわらず金銀の装飾が施されていました。

2月28日、京都内裏東にて馬揃えが行われました。仮宮殿で天皇や公家らが見物する中、畿内や近隣諸国から集まった大名や諸将が馬揃えに参

加します。参加者全てが他に負けじと、絢爛豪華な衣装をまとっていました。一番手には、丹羽長秀。
続いて蜂屋頼隆・明智光秀・村井貞成がそれぞれ国衆を従えて馬場へ入場しました。

その後ろを連枝衆が続きます。一番手は織田信忠・騎馬80騎。続いて信雄・騎馬30騎。信長の弟信包・騎馬10騎。信孝・騎馬10騎。甥の信澄・騎馬10騎。その後ろを長益(後の有楽斎)・長利・勘七郎・信照・信氏・周防・孫十郎。

織田一門に続き近衛前久・正親町季秀・烏丸光宣ら公家衆。細川昭元・細川藤賢ら旧幕臣衆。この旧幕臣衆のなかには武田信玄に敗れ信濃を追われていた元信濃守護・小笠原長時も加わっていました。その後ろを信長の馬廻り衆や小姓

衆、そして柴田勝家率いる越前衆柴田勝豊・柴田三左衛門・不破光治・前田利家・金森長近・原政茂。さらに弓衆100人が続きます。

その後が信長本隊です。辰の刻(午前8時頃)に下京の本能寺から室町通を北進し、一条を曲がり馬場に入場します。左義長のときと同様、信長は描き眉の化粧に、このときは金紗きんしゃの“ほうこう”を着け、唐冠の頭巾の後ろに花を立て、紅梅文様の白い段替わりの小袖、蜀江錦しゅうかうにしきの小袖かたぎぬを着て、肩衣には紅色どんすの緞子を身に着けました。それぞれ桐唐草文様が施され、天皇から頂いた牡丹の造花を腰に挿し、白熊(ヤクの尾)の腰蓑、金銀飾りの太刀・脇差など派手な出で立ちでした。

行進は、未の刻(午後2時頃)まで続き、この間に信長は何度か馬を乗り換え、行進以外にも様々な趣向が凝らされたようで、最終的に信長が馬場を退去し本能寺に帰還したのは夕刻だったといわれています。『信長公記』しんちょうこうきにはこの時の信長を、住吉明神という日本の神が姿を現したように見えたと記されています。

この馬揃えは、信長の正親町天皇に対する譲位要求の圧力だったとする解釈もあります。なぜなら、このあとあまり日をおかず3月5日に二度目の馬揃えが行われているからです。『信長公記』には「禁中より御所望に付いて」と朝廷側から望まれたように記されていますが、実際には譲位について色よい返事がもらえなかったので、再度圧力をかけたのではないかとも考えられています。

5-10 伊賀平定

伊賀は山に囲まれた地域で、多数の国人、土豪が割拠していました。多数の城郭や館をつくり、団結して他国の戦国大名の干渉を排除してきました。

伊賀攻め

天正7年(1579)、織田信雄おだのぶかつは独断で伊賀に侵攻して失敗し、信長からきびしい叱責を受けていました。これに懲りた信雄は天正9年(1581)9月、信長の命令で四つの出入り口から大軍で一斉に乱入する作戦で攻めます。

信雄は御代河原に本陣を構え、近江甲賀口から、信雄たきがわかずます、滝川一益にわながひで、丹羽長秀しがらき、甲賀衆、信楽口からは堀秀政と近江衆、加太口かたらから滝川雄利たきがわかつとし、織田信包おだのぶかね、伊勢衆、大和口からは、筒井順慶、大和衆という陣容で出陣します。

もっとも激戦になったのは、佐那具城の攻防戦でした。佐那具城の伊賀衆は城外に撃って出ますが、滝川・堀両隊がそれを打ち破り城に追い込みます。翌日、観念して伊賀衆は退散し、織田軍も陣を引き上げました。そして、信雄の軍勢が入城し佐那具城を占拠すると、各方面から攻め入った軍勢が合流し軍議が開かれました。丹羽らの軍は吉原城主や西田原の城主らを討ち取り、滝川らの軍は、河合城主田屋甚之丞みぶのや壬生野城主らを討ち取り、さらに木興城きこで抵抗していた上服部党や下服部党を壊滅させました。大和国境近くの春日山にも75人の指導者を含む多くの老若男女が逃げ込みますが、筒井らの軍によりことごとく討ち取られました。

伊賀平定

こうして伊賀国内で大量の殺戮が繰り返され、伊賀は平定され伊賀三郡は信雄に、残りの一郡は信包に与えられます。

信長は10月9日、信忠、信澄を伴って伊賀視察に出発、甲賀郡の飯道山ほんどうさんから国内を望見し、10日には伊賀一宮に至り国見山に登って国中を見渡します。12日に信雄・順慶らの陣所を見舞い、名張まで赴いて要所に要害を築くよう命じ、帰路につきました。在陣衆も17日に帰陣しました。



織田信雄像(京都市建勲神社蔵)

5-11 武田氏を滅ぼす

甲斐国の武田氏は、信玄の死後、勝頼が家督を継ぎますが、天正3年(1575)、長篠・設楽原の戦いにおいて織田・徳川連合軍に大敗したことを契機に、領国の動揺を招き、天正10年(1582)、信長の本格的侵攻(甲州征伐)により、嫡男・信勝とともに天目山麓の田野で自害します。これにより平安時代から続く甲斐武田氏は滅亡することになります。

勝頼、 上杉氏との接近

天正6年(1578)、越後の上杉謙信が亡くなると、二人の養子による家督争いが起こります。武田勝頼は北条氏との同盟を破棄して、上杉景勝と結び、北条氏と戦うことになりました。北条氏は勝頼と戦う天正7年(1579)に、信長に使者を送り接近を図ります。

長篠・設楽原の戦いの大敗後、勝頼は、遠江における重要拠点の高天神城が徳川家康に侵攻され、籠城兵が餓死に及ぶ危機に陥っても、城に援軍を出さなかったため、武田氏の中で不信と失望が広がっていました。



武田勝頼肖像(東京大学史料編纂所蔵)模写

甲州征伐

天正10年(1582)2月、信玄の娘婿で外戚の木曾義昌が新府城築城のための負担増大への不満から信長に寝返ります。これに激怒した勝頼は、人質を処刑した上で即座に木曾討伐の軍勢を送り出します。しかし、雪に阻まれ進軍は困難を極め、地理に詳しい木曾軍に翻弄されます。その間に織田信忠が伊那方面から、金森長近が飛騨国から、徳川家康が駿河国から、北条氏直が関東及び伊豆国から武田領に侵攻します(甲州征伐)。これらの侵攻に対して武田軍では組織的な抵抗ができず、勝頼の叔父信廉は在城する対織田・徳川防戦の要であった大島城を捨て甲斐に敗走します。信濃伊那城においては、織田軍が迫ってくると城主・下条信氏が家老によって追放され、織田軍を自ら迎え入れます。信濃松尾城主の小笠原信嶺、駿河田中城主の依田信蕃らも戦わずして降伏し、さらに武田一族の重鎮である穴山梅雪までも勝頼を見限り、織田方に寝返ります。これらの情報を耳にした武田軍の将兵は、勝頼を見捨て逃げ出します。唯一、抵抗を見せたのは勝頼の弟である仁科盛信が籠城する高遠城だけでした。

天目山麓の戦い

同年3月、織田軍の進撃の早さに、態勢を立て直すことが出来ず諏訪から撤退した勝頼は、新府城を焼き捨てて、小山田信茂の居城である岩殿城に逃げようとしませんが、信茂が織田軍に投降することに方針を転換したため、勝頼は進路を塞がれます。後方から滝川一益の追手に追われ、勝頼一行は武田氏ゆかりの地である天目山棲雲寺を目指しますが、その途上の田野で追手に捕捉され、嫡男の信勝や正室の北条夫人とともに自害に追い込まれます(天目山麓の戦い)。享年37。これにより、甲斐武田氏は滅亡します。

3月26日、甲府に入城した信長は、信忠の戦功を賞し梨地蒔の腰物を与えます。論功行賞により、寄騎部将の河尻秀隆が甲斐国と信濃国諏訪郡、森長可が信濃国高井・水内・更科・埴科郡、毛利長秀が信濃国伊那郡を与えられたことから、美濃・尾張・甲斐・信濃の四か国に影響力を及ぼすようになりました。

5-12 秀吉の備中高松城攻め

信長の次なる目標は、中国・四国の平定でした。中国に羽柴秀吉、四国に三男織田信孝が攻め入ることになります。

備中高松城 水攻め作戦

天正10年(1582)、羽柴秀吉は、備中における毛利氏の最前線である高松城(岡山市)に30,000の軍勢で攻め入ります。しかし、高松城は周囲を沼や堀で囲まれており、攻め入るには細い道を通る以外に方法がなく、大軍で侵攻するのは困難でした。毛利本隊の援軍が背後から攻めてくるとも限らない状況下で、秀吉は得意の兵糧攻めではなく、城ごと水攻めをする陣を敷きます。

周辺の農民たちを集め、多額の金を使い堤防を作らせました。破格の手間賃を示された農民たちは昼夜問わず働き、わずか12日間で堤防は完成したといわれています。

その堤防は、全長4km、高さ8mという巨大なもので、足守川のあしりがわの水はせき止められ、高松城は徐々に浸水していきます。しかも、季節はちょうど梅雨時であったため、浸水速度をいっそう加速させました。

この異常な状況に、高松城を防守する清水宗治は毛利氏に援軍要請を出しますが、毛利輝元をはじめとする軍勢10,000余りが到着した頃には、すでに高松城は湖に浮いた孤島状態になっていました。高松城を助けるには堤防を壊すほか策がありませんでしたが、その堤防は秀吉軍に守られていたため、やむなく毛利輝元は秀吉に和睦を



羽柴秀吉(東京大学史料編纂所蔵)模写

5-13 明智光秀の中国出陣

明智光秀は、天正9年(1581)の馬揃えで総括責任者という大役を務めました。その後大きな活躍の場は与えられず、安土に戻されていました。安土では、徳川家康の饗応役に任命されましたが、高松城(岡山市)包囲中の羽柴秀吉の援軍に赴くように信長から急遽命じられます。

中国への 出陣命令

天正10年(1582)5月14日、信長は明智光秀に対し、武田氏との戦いで長年労のあった徳川家康の饗応役を務めるよう指示します。光秀はその指示を受けて、翌15日から3日間、安土において家康らをもてなします。

そんな折、高松城(岡山市)に攻め込んでいた羽柴秀吉から、応援を要請する旨の文書が届きます。信長はこの好機を生かし、中国から九州まで一気に平定してしまおうと決心し、光秀とその与力衆に援軍の先陣を務めるように命じます。家康の饗応役を務めていた光秀はその任を離れ、居城の坂本城で出陣の準備を行います。

愛宕山戦勝祈願

5月27日、光秀は丹波亀山城の北に位置するあたご愛宕山へ参詣し、一晩愛宕神社に籠もりおみくじを何度も引くなど、戦勝祈願に注力したといわれています。信長への謀反を決意したのは、このときだったのかもしれませんが。

翌28日、光秀はいとくいんにしのぼう威徳院西坊で連歌の会を催し

ますが、光秀が一番に詠んだのが有名なこの句です。「ときは今あめが下知るさつき五月かな」。

意を決した光秀は、その日のうちに亀山城に戻ります。



明智光秀肖像(伝)(東京大学史料編纂所蔵)模写

5-14 本能寺の変

いよいよ、戦国の覇者、信長の最期の時が訪れます。最も信頼を置いていたともいわれる重臣、明智光秀の謀反により49年の人生に幕を閉じ、戦国の世は、次代の豊臣秀吉、徳川家康へと移り変わっていきます。

信長の油断

自ら中国出陣への準備を進める信長は、5月29日、安土城を留守居衆と御番衆に託すと、戦陣の用意をして待機するよう命じ、小姓衆2,30人のみを率いて上洛し、京での定宿であった本能寺に入ります。信長の上洛は、中国出陣前に道具開きの茶会を催し、博多の豪商島井宗室しまいそうしつが所持する茶器ならしばかたつき、檜柴肩衝を入手するためであったとされています。別の説によれば、暦統一問題(三嶋暦への統一)などについて、朝廷と交渉するための上洛だったともいわれています。

6月1日、信長は、近衛前久このえさきひさ、勸修寺晴豊かじゅうじはるとよ、甘露寺かんろじ経元つねもとなどの公卿・僧侶らを招き、本能寺で茶会を開いた後、妙覚寺より来訪した信忠と酒を飲み交わしたといわれています。信忠が帰った後も、信長は深夜遅くまで本因坊算砂ほんいんぼうさんさと鹿塩利賢かしおりけんの囲碁の対局を見て、しばらくした後で就寝しました。

光秀出陣

6月1日、光秀は13,000の手勢を率いて丹波亀山城を出陣します。光秀はそこから1町半ほど離れた場所(篠村八幡宮ともいわれる)で軍議を開く

と、明智秀満、明智光忠(次右衛門)、藤田行政ゆきまさ(伝五)、斎藤利三さいとうとしみつらと綿密に相談し、「信長を討果たし、天下の主となろう」と企てたといわれています。亀山から西国への道は通常南の三草山を越えますが、光秀は「老の山(老ノ坂)を上り、山崎を廻って摂津の地を進軍する」と兵に告げて軍を東に向かわせます。

6月2日、光秀軍は信長が宿泊していた本能寺を急襲して包囲します。不意を突かれた信長と小姓衆は、はじめ何が起きたのかわかりませんでした。御殿に鉄砲が打ち込まれ、光秀の謀反であることを覚ります。信長は「是非に及ばず」と、弓で応戦し、女性たちには本能寺から逃れるように指示します。光秀軍13,000に対し、近衆100人足らずしかいない信長は奮戦しましたが、やがて自ら寺に火を放ち自刃します。享年49。

妙覚寺に滞在していた信忠は、光秀の謀反を知ると本能寺へ救援に向かいますが、信長自害の知らせを受け、誠仁親王まねひとの居宅である二条御所に移動します。信忠は誠仁親王を脱出させると、身近に仕えるわずかな兵とともに籠城し、善戦を見せますが、光秀軍に適わず自害します。享年26。

ここに、天下統一を目前に控えた織田信長の時代は終結しました。



本能寺信長公廟(京都市中京区)



旧本能寺址(京都市中京区)